

4階のラウンジに、新藤圭介君(8組)の「ジパング」が掛けられた。「ジパング」は壁に別の意味を与えた。壁は、ただの壁でなくなったのだ。「ジパング」は、階段を上ってきた私たちに、何かを問いかけているような気がする。

アリストテレスはこう言ったそうだ。

人は、水がなくなれば、のどが渇き、水をほしがる。お腹がへれば、食事をしたくなる。これは生きていくために必要な欲望。誰でも、動物でも持つ欲望。ところが真(正しいこと)善(善いこと)美(美しいこと)への欲望は、知恵がなければ、それがなくなっても気づきはしない。「4階に美しい絵がほしい」は、「水がほしい」とは違うのだ。ぜひ、この絵を通して、人として必要なことを考えてほしい。

「ジパング」の作者新藤圭介君に、この絵にこめた自分の思いを書いてもらった。

2年8組 新藤圭介

昨年7月下旬、私は夕焼けの絵を描き始めました。

美術部では例年「埼玉県高等学校美術展」に50号(116.7cm×91cm)の油絵を出展していて、それに向けて美術の上山先生の指導の下、5カ月間のチャレンジでした。私にとって、その油絵は春高の美術の授業に次いで、まだ2回目で、それに50号という画面の大きさに圧倒されていました。

先生の「描きたいものなら続けられる」という教えから、普段から「綺麗だ」と思っていた4階の教室からの夕焼けを題材にしました。そして、油絵の道具の使い方、技術、絵を描くための物の見方など、一から教えてもらいながら、キャンバスに描いてきました。

ところが、1、2ヶ月経った頃、描けば描くほど自分の思っているものとは別のものになっていく気がして筆が止まりました。そんな時、先生が言ったのは「最初に描きたいと思ったときの気持ちを大切に持ち続けること」ということでした。

「なるほど」と思った私は毎日夕陽を見て、「綺麗だ」という初めの感動を忘れないようにしました。また放課後夕日を見ていると、友達とその美しさに共感できたり、夕日の写真を見せてくれたり、アドバイスをくれたりして、さらに色を重ねていくことができました。

私は、今回の制作を通して油彩の事だけでなく、夕焼けの美しさ、共感すること、表現すること、伝えることなどについても学べ、成長できたと思います。その中でも最も大きかったのは「初めの気持ちを忘れない」ということです。これは色々なことに通じると思います。この経験を生かしていきたいです。

終わりに、支えてくださった先生方、友達そして一から指導して下さった上山先生に感謝いたします。

※埼玉県高等学校美術展：平成26年は12月21日～26日までさいたま市プラザノースで開催され、新藤圭介の作品「ジパング」は優秀賞になりました。